上田西高の教育

初のグアム修学旅行（ジーゴ平和慰霊公苑）での平和セレモニー

第 57 号 2013.3.2発行

『初めての西高で見たもの感じたこと』
校長　髙見澤正彦…2
初めてのグアム修学旅行　２学年主任　中村幸一…4
初担任を終えて　３年２組担任　帯刀秀幸…8
「政治経済」の授業における「模擬投票」の試み～
「公民」教育を目指して　社会科　宮坂正議…10
「鐵の道」題字（全国ローカル鉄道応援酒）
揮毫に取り組んで　書道部顧問　藤澤文栄…14
上田西高校のキャリア教育
進路指導係主任　森下　暁…15
編集後記　…16

上田西高等学校

初めての西高で見たもの 感じたこと

校長　髙見澤　正　彦

本年度から上田西高校にご縁をいただきました。これまでに上田地区での勤務がなく、地域の事情に疎い私であります。時々、長野と佐久の往復に利用する列車内で目にする西高生の印象は、態度・服装とも整然として高校生らしい清潔感を感じていました。

初めて上田西高校の門をくぐり校内を案内していただいた折、広い敷地に両翼98ｍの野球場や公認規格のサッカー場をはじめ、優れた施設・設備にたいへん感動しました。同時に、クラブ活動に真剣に取組み、生き生きとした生徒諸君の気持良い挨拶に恐縮した初日でした。

あの日から一年が経とうとしています。この間、本校生の活躍や特色ある取組みに感激・感動の日々でした。

春の県高校総体では、ほとんどが東信大会を勝ち抜いて県大会に駒を進めました。中でも、サッカーとレスリングは県の覇者としてインターハイに出場し、硬式女子テニスは準優勝で北信越大会出場を決めるなど運動クラブの活躍は目覚しいものでした。

秋の活躍も抜群でした。北信越高校野球大会は新潟県で開催され、本校は同点再試合の新潟県央工を破り、続く石川星稜にも勝利して４強入りを果たしました。甲子園出場が掛かった福井の強豪敦賀気比戦では、延長11回１対２で涙をのみましたがあと一歩でした。先日、高野連から甲子園選抜大会の「北信越地区第一補欠校」の連絡をいただきました。

軟式野球部も親善北信越大会で見事優勝、アーチェリー新人大会のＦＩＴＡラウンドで男女ともに本校生が優勝して三月の全国大会に出場を決めました。

また、サッカー選手権県大会は、準決勝で惜敗して本年度の二冠達成は成りませんでしたが、連覇を狙う都市大塩尻との準々決勝で最終盤に劇的な同点に持込み、ＰＫ戦で相手の先頭から３人を連続で止めて勝利をつかんだ感動の一戦でした。

原稿枠の都合で他クラブの活躍を省略しますが、文化系クラブは地道な取組みを続け、地域と連携した活動などにも積極的に参加しながら着実に成果を上げています。

次に、感心した特色ある取組みの一部について挙げてみますと、まず、「ボランティア活動」について、平成11年３月に発生した東日本大震災に際し、義援金や物資支援は勿論、岩手県大槌町への複数回の「被災地ボランティア」や「菜の花プロジェクト」への参加など、継続した活動を実施しています。

また、歯医者さんが中心のＮＰＯ「フィリピン医療を支える会・ハローアルソン」主催の医療支援活動では、現地の恵まれない子供たちがなかなか手に入らない歯ブラシや石鹸、タオルの物資支援と現地での医療補助活動に毎年数名の生徒が参加しています。マニラ近郊の恵まれない環境の中で必死に生きる子供達に出会い、厳しい現実を目の当たりにして様々なことを感じ・考える機会になっています。

更に、医師の鎌田実さんが代表のＮＰＯ「日本イラク医療支援ネットワーク」が毎冬に実施しているチョコ募金活動のための袋詰め作業ボランティアに30人ほどが参加しています。白血病や癌に苦しむイラクの子供達に向けた医療品購入と、福島県の原発事故で避難を続ける子供達に学用品を贈る支援を行うものです。

学校周辺における活動では、近隣地域の清掃や雪掃きをはじめ、西上田駅南口「緑のフェスティバル」を主催し、南口の企画整備から携わって以降、地域の諸団体と協力して今年で10回目の開催でした。南口通路の清掃や飾り付け、一月の南口「餅つき大会」などを継続して行い、地域の中にしっかりと根を張った活動をしています。

また、クリスマスには、民生委員の方々に同伴をお願いして、近隣地区の一人暮らしの高齢者の皆様に手作りお菓子やカード等をお渡ししてたいへん喜ばれています。「毎年この時期になると若い生徒さんと話せるのが何よりも楽しみ」の声を頂きました。

もうひとつ。本校の特色である「国際交流」は、昭和63年に初めてアメリカの長期留学生を受入れて以降、今日までにオーストラリア・ゴスフォード市と中国・天津市の学校と姉妹校提携をして交流を継続しています。これまでに地域のロータリークラブとの協力連携を含めて、本校生の長期留学派遣（概ね半年以上）が89人、短期留学派遣（概ね半年以下で、半月ほどの研修を含む）が３５２人となり、逆に、海外からの生徒受入れについては、長期が33人、短期が２２９人にのぼります。

なお、平成7年度からは海外への修学旅行が始まり、現地の高校生と有意義な交流を実施しています。この他、外国からの大学サマースクール、修学旅行団、サッカークラブなど、学年やクラブを中心とした交流も活発です。これまでに海外14ヶ国（米・加・英・仏・蘭・豪・新西蘭・韓・中・台・香・新嘉坡・馬・比）と交流しています。

こうした本校の積極的な国際教育の取組みから、学校全体に高い国際交流意識が漂い、「自らの学力と行動力で未来を切り開く人材の育成」という理念の元、語学習得、異文化理解、自立心の涵養、情報発信のためのコミュニケーション能力育成など、人間力の養成にも大きな影響を与えています。

留学生関係については、留学センターに職員4人が常駐して双方の橋渡しや交渉・相談等を一括して担当していますし、保護者の皆さんも友好的にホームスティの受入れや支援等に協力してくださり、しっかりしたサポート体制が確立しています。

この他にも、手を掛け工夫された「本校のホームページ」や新聞委員会が発行する「千西一遇」は、本校の教育活動を紹介する「開かれた学校づくり」の一端を担い、特色ある取組みの一つになっています。

学校は「学習・進路・生指・特別活動の四つの指導の柱」がバランスよく機能して大きな力となるものです。来年度から本校普通科のⅠ類・Ⅱ類が、【進学】・【特進】に名称変更をして新たな出発をします。安心・安全・安定の３Ａを基本として、知・徳・体の調和ある人材育成に学園を挙げて全力で取組んで参りたいと存じます。一番の願いは、生徒諸君が本校の全ての施設・設備・機能を思う存分活用して、夢や目標に向けて大きくジャンプしてくれることです。本校が「地域から信頼され、期待される学校」としてなお一段と充実した教育活動を展開すべく、一層、生徒諸君と共に額に汗したいと思う此の頃です。

初めてのグアム修学旅行

二学年主任　中村幸一

昨年度の行き先である「サイパン」は、今年度から航空機会社の定期便見直しで縮小されました。そのため学年を三隊に分け移動しなければならないことや、尚且つ日程は、各隊に一日以上差があり、本校の伝統である学年全体で修学旅行を体験させる目的から大きく外れてしまうことが分かりました。また県より「修学旅行費用を総額十一万円（海外なら二割増）内で実施すること」。との指針も示されました。そのため当初は、修学旅行小委員会（校長・教頭・教務主任・各学年主任で組織された委員会）では、できるだけ費用を抑えられ、引率経験も豊富で姉妹校のある「中国」を行き先候補と決めていました。しかし立て続けに起こる中国国内の情勢不安や生徒、保護者の方の要望を考慮し、別の行き先を検討することにしました。

中国に比べると金額的に割高になってしまうが、時差も少なく、移動時間も少ないグアムへ行き先変更をしました。そして昨年、十一月十一日（日）から十五日（木）まで、成田での前泊を含む四泊五日の修学旅行を実施しました。

本校の修学旅行の目的

① 国際交流

現地高校生（サイモン・サンチェス高校）と触れあい交流する中で、相互理解につとめ、「国際交流」を考える。また、その過程で実践的な英会話力を育む。

② 平和学習

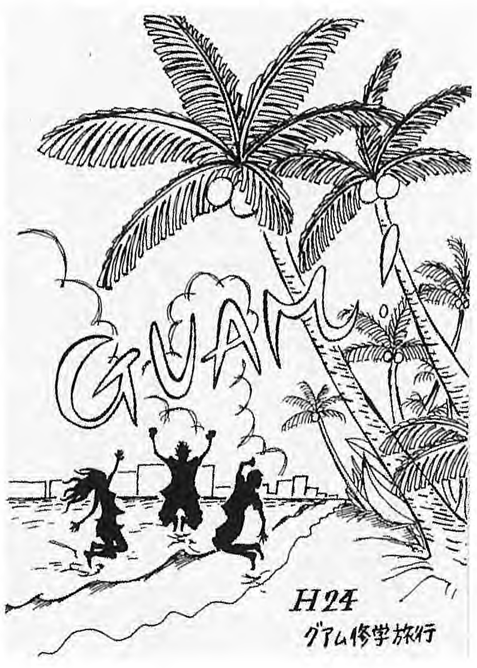
第二次大戦、太平洋戦争における歴史を学び平和を考える。また、戦争の遺産を直に見て学ぶことにより、戦争を起こしてはならないことを学ぶ。

③ 異文化・自然体験

グアムの文化や自然に触れることで、地理や理科で学ぶことを自らの肌で実感する。

④ 自主活動と集団行動

旅行中のあらゆる行動において、集団行動を意識する。また一人一人が自主規律の決定から実施までの過程に積極的に関わり、全員で学年のリーダー集団としての力を高めていく。（リーダーシップの育成）



毎年生徒の手によって描かれる栞の表紙

国際交流について

生徒の感想の中でも一位、二位を争うほど印象的だった日程に学校交流があります。現地生徒と触れ合うことで、普段感じなかった英語力の必要性や、コミュニケーション能力、また積極的に人と関われる能力が大切であることを実感できたようです。

【生徒の感想より】

・楽しく交流できた。もっと日本の良さを伝えられたらと思った。

交流校の生徒からヤシの葉を使ってリング作りを教わる

・英語が必要だと実感した。
・外国の高校生と交流するという貴重な体験ができたのでよかった。
・思っていたよりもずっと楽しかった。
・日本と外国では人との接し方が違ってよかった。少しだけ英語が話せるような感覚になった。
・サイモンサンチェス高校の生徒は楽しい。グアムの人たちはとても乗りがよかった。
・すごく楽しかった。英語で会話して通じたり、通じなかったりだったけどジェスチャーなどで頑張った。ペアーの人と仲良くなれた。

平和学習について

本校の教育を語る上で、修学旅行の中でもかなりウエイトを置いて指導してきた内容です。

社会科の先生方やＡＬＴの先生に協力を得ながら、事前学習をしっかり行いました。また外部からは、全国グアム島戦友会事務局長の小川東二さんを招き講演をしていただき、またグアム到着後すぐに、南太平洋戦没者慰霊協会の青木一美さんにも講演をしていただきました。また三日目の午後は日本守備軍（小畑中将軍司令官）玉砕の地にある慰霊塔の前で平和セレモニーを行い、その後、戦跡めぐりをしました。この日は、グアム島で行われた日本軍とアメリカ軍の壮絶な戦いを想像しました。

慰霊塔前　千羽鶴を献げる代表生徒

しかし戦後六十七年も経過してしまうと戦争体験をされた方に直接お話を聞くことができなくなってきています。そのため生徒の心の奥底まで届くメッセージ性は非常に弱くなってきているのが現実です。しかし二度と同じ大きな過ちを繰り返さないためにも平和学習は継続的におこなっていかなければなりません。教師側も試行錯誤しながら、若い世代にどう伝えるのか改めて考えさせられた旅行になりました。

【生徒の感想より】
・戦争のものがたくさんあって学ぶことができた。
・戦争の歴史を目で見たり、お話を聞いたりできたのはすごくいい体験でした。
・日本では見ることのできないものを見れたりしてとても勉強になりました。
・平和学習により、自分自身の意識が変わったと思う。

太平洋戦争博物館（日本の飛行機）

異文化・自然体験について

今回生徒が非常に目を輝かせて取り組んだのがマリンスポーツ体験です。南の国ならではの開放感の中、四日目の午前中に取り組みました。

綺麗に澄んだ海でおもいっきり泳いだり、バナナボート、ジェットスキー、ビーチバレーなどのアクティビティに取り組みました。普段の生活では決して体験できないことです。まさにすべてを忘れ

させてくれるほどの夢心地の中での体験でした。特に我々の住む日本のように四季が存在する国の者にとって、異国を感じる絶好の機会となりました。

【生徒の感想より】

・海がきれいでよかった。とても楽しかった。
・初めてジェットスキーに乗ったので楽しかったです。
・海の色がきれいで、マリンスポーツのジェットスキーは楽しかった。
・是非またグアムで遊びたい。

自主活動と集団行動について

この活動も本校教育の中で非常に重要で大切にしてきた活動です。毎年各クラスの正副ルーム長を中心に、ルーム長会を組織し、生徒に自治活動を積極的に行わせています。

今回はさらに各クラスから修学旅行委員として一名増員し、総勢三二名体制で修学旅行に臨みました。

ルーム長会長の宮原君は栞の中で次のように述べています。

「私は、修学旅行を楽しく思い出に残る旅行にするために、ルーム長会の方達や修学旅行委員会のみなさん、先生方に協力してもらってここまでやってきました。修学旅行は遊びの為の旅行ではありませんが、私は楽しく思い出に残るようにという思いを持ち続けてやってきました。このグアム修学旅行は、先生方だけで作ったのではなく、二年の皆さんで創り上げたことを自覚してもらい、学ぶところはしっかり学び、楽しむ時は、しっかり楽しんでほしいです。最後に、ここまで修学旅行を作り上げる準備時間、私をはじめ、ルーム長会を支えてくれた皆さんに感謝しています。高校生であることを自覚し、皆さんと創った自主規律を守り、是非、思い出に残る最高な修学旅行にしましょう。」

ルーム長会長の宮原君　カヤックレース前挨拶

この内容のように生徒は、修学旅行は単なる行事ではなく、また教師側の一方的な指導のまま行うものでもないことを自覚していました。

先生が提案した内容についても、ルーム長会でよく検討を行い、要望をまとめ学年会の教師と交渉する機会を設けることもしました。教師側も「生徒が作り上げる修学旅行」を考慮し、あまり全面に出ないように配慮しました。しかし教師側とルーム長会の足並みを揃えるため事前にルーム長会担当教諭と私が綿密な打ち合わせをしながら、ルーム長会交渉を3回行いました。

その結果教師側の提案では、ホテルに戻ったあとの外出を安全管理の観点から一切認めない方向で計画していましたが、「是非ホテル前のビーチでサンセットを学年全員の生徒に見せてあげたい。」との要望から三日目の夕方ビーチへの外出を許可しました。

このようにルーム長会の意見（学年全体の生徒の声）を学年教師が汲みとってあげることにより、生徒にも自覚が生まれ自分たちで勝ち得た権利を大事にすることにも繋がっています。

この交渉過程は、今後社会に出てしっかりと、自分の意見が言える大人になるための訓練の場でもあります。

もう一点今回の修学旅行で大きな成果がありました。それはクラス対抗カヤックレースをルーム長会主催で行ったことです。

本校の長い修学旅行の歴史の中で初めての試みです。

ルールについてはルーム長会で詳細を決め、事前にレース順などを掲載した冊子も作成し配布しました。

各クラスとも白熱した戦いになり、自分のクラスを優勝させようと、一生懸命仲間に声援をしていました。まさにこの活動は学年全体で修学旅行を行っているという連帯感を生み、非常に盛り上がりを見せました。

3人一組で行われたクラス対抗カヤックレース

最後に

【生徒向けアンケートより】

修学旅行全体ではどうでしたか

○とても楽しかった・63％　○まあまあ楽しかった・31％

【保護者向けアンケートより】（ご提出分された分について）

お子様からの話を聞いて旅行に参加させたことに対する感想は

○とても良かった・67％　○まあまあ良かった・32％

アンケート結果からも分かる通り、九割以上の生徒、保護者の方から支持を得る旅行となりました。引率をした側としても非常に嬉しい結果です。

当初は目的地変更で大変でしたが、旅行後、「将来グアムにもう一度行きたい。住みたい。」と話す生徒もいて、一定の成果を出すことができました。この場をお借りして二学年保護者の皆様に感謝したいと思います。

私は修学旅行の帰りのバスの中で毎回生徒に話す内容があります。「長野県内には、二万人以上の同年がいます。しかしこの一七歳という時期までに海外旅行を経験できるのは、その内の僅かな人だけです。いかに君たちは幸せで、貴重な体験ができたかを考えて欲しい。そして保護者の方にお土産を送るのと同様にお土産話をたくさんしてあげてください。そして「ありがとう。」と感謝の言葉を添えてください。」

この話をすると生徒も海外修学旅行に参加したことを真摯に受け止めてくれます。

本校の大きな特色の一つである海外への修学旅行。中には国内で良いのではという声も聞かれます。しかし世の中はすでにグローバル化し、外務省の海外在留邦人数統計調査によると、平成二三年十月現在一一八万人もの日本人が、海外で生活をしています。これはちょうど大分県の人口とほぼ同じ数だそうです。（永住者は四〇万人もいます）

日本の総人口はここ十年横ばいで推移しているのに対し、海外に出ていく日本人は、毎年右肩上がりで増えています。将来どんな進路を選んだとしても、海外に目を向けざるおえない時代が既に到来している証拠でしょう。だからこそ海外旅行を経験することは必ず生徒の人生にとってプラスになると考えます。今後も上田西高校の修学旅行にご支援ご協力をよろしくお願いします。

初担任を終えて

三年二組担任　帯刀秀幸

～担任として～

教員に成り始めの頃、同僚の先生から「教員は担任をし、卒業生を出して初めて一人前になれる」という話を聞いた。確かに教員の仕事は教科指導、部活動指導、生徒指導、分掌など多岐に渡るが、中でも担任という仕事は教員にとって特別なものだと感じる。生徒達にとっての高校三年間は、人生で一度しか経験することがない貴重な時期であり、そこで出会う担任は生徒達にとって大きな存在となる。実際、私の中学、高校時代の担任の先生は私の人生に大きな影響を与えてくれた。だからこそ私も担任をするにあたっては強い覚悟を持って臨まなければいけないと感じていた。この三年間を振り返ってみると、果たして生徒達にとって大きな存在になれたかはわからないが、生徒の目線に立ち、生徒の声に耳を傾け、精一杯生徒達と向き合った三年間だったと言える。この三年間を振り返ってみようと思う。

～試行錯誤の日々～

入学式の日、初めてのホームルームで生徒達にどのようなクラスを作っていきたいのかを話したのを覚えている。「自主的に行動できるクラス」・「挨拶ができるクラス」・「規律が守れるクラス」・「友達の事を思いやれるクラス」などである。しかし、理想と現実は違い、なかなかクラス経営がうまくいかない日々が続いた。部活動指導なら生徒達が共通の目標を持ち、同じ方向を向いているため、目標達成のために指導することはやりやすい。しかし、クラスは同じ目標を持っている生徒ばかりの集まりではないため、その生徒達をまとめるのに始めは苦労した。そこでまず、私が心がけた事は、生徒一人一人を理解する事だった。クラス全員に積極的に話しかけコミュニケーションをとった。入学から一か月ほど経った頃に個別面談を行うなどもした。コミュニケーションをとる中で生徒一人一人の個性や考え、今抱えている悩みなど多くの事を知ることができ、生徒との距離もだいぶ縮まった。初めての担任でクラス経営のイロハもわからない不安だらけの船出ではあったが、三十五人の生徒達と共にその一歩を踏み出した。

～ある生徒との出会い～

初めて持ったクラスで特に印象に残っている生徒がいる。その生徒は入学式から他の生徒とは全然様子が違っていた。これから高校生活が始まるのに全く笑顔はなく、何か世の中の全ての事に不満を持っている顔をしていた。話しかけても無反応で、指示したことも積極的に行おうとはしなかった。始めの頃は、その生徒がまだクラ

スに馴染めていないだけで、時間が経てばそのうち様子が変わるだろうと思っていた。しかし、一か月、二か月経ってもその生徒の様子は相変わらずで表情は厳しさを増すばかりであった。その時は正直「大変な生徒を抱えてしまったな」と感じていた。ある日、教室巡視をして何回か確認したが、一向に記入させていた時のこと、他の生徒は声を荒げ「書いてんじゃねえーかよ」と注意した。すると突然その生徒は負けじと「書いてないから言ってるんだよ」と叫んで反抗してきた。私は少し文字を書いただけで、その生徒は一度カッとなると手がつけられなくなることが多く、その後もその生徒との言い争いが絶えることはなかった、それでも言い争う度に何度も何度も話をしてきた。その生徒が問題行動を起こした時も、学校を辞めたいと言ってきた時も一緒にがんばろうと言って長い時間をかけて話をした。すると話を重ねていく中でそれまで見られなかった笑顔が見られるようになった。その生徒が私に対して少しでも心を開いてくれたのではないかと思うと本当に嬉しかった。結局その生徒は二年次の途中で学校を辞めてしまったのだが、あの笑顔は今でも忘れることができない。生徒の目線に立ち、お互い腹を割って話をすることの大切さを私はその生徒から教わったような気がする。

～最後に～

三年間担任をしてきて嬉しかったことは、生徒達の成長を近くで見守ることができたことだ。生徒達はクラスマッチや文化祭を経験し、入学した時よりも一回りも二回りも大きく成長した。特に三年生の文化祭では自分達だけでクラスの企画を考え、指導者をつけずに見様見真似でダンスを覚え、練習を重ねて自分たちのダンスを完成させた。賞を取ることはできなかったが、生徒達の心の中にも私の心の中にも大切なものを残してくれたと思う。

私が三年間担任を務めることができたのは、多くの人達の支えがあったからだ。担任の心得から始まり、担任業務の様々な事まで多くの先生方から教えてもらった。保護者の方々には頼りない担任だったかもしれないが温かく見守ってもらった。そして三年間共に過ごした生徒達にも感謝をしたい。生徒達とは衝突することも沢山あったけれど、その中で私自身担任として成長することができた。多くの人達にこの場を借りて感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

「政治経済」の授業における「模擬投票」の試み～「公民」教育を目指して

宮坂正議

1. はじめに

自民党の歴史的圧勝というかたちで幕を閉じた第46回衆議院議員総選挙（平成24年12月16日実施）において、わたしたち「公民科」の教員が最も憂慮するのは「戦後最低」というその投票率である。59.32％という低い数字の背景に様々な事情があることを考慮しても、間接民主制をとるわが国で、市民が国政に関わるほとんど唯一といっていい機会がこれほどまで活用されないのにはある種の焦燥感を抱かずにいられない。

わたしたちは、公民科教育のひとつの実践として「模擬投票」を企画した。この試みが目指すのは、一般市民が「政治」に関わることのできるその「関わり方」をよりリアルなものとして学習してもらうことだ。「模擬投票」という実践を通して、俯瞰的目線でこれまでの「座学」を見つめなおすことができれば、我々の生活や社会を自分たちでつくってゆくために欠かせない、アクチュアリティをもった教科として「政治経済」を捉えなおすことができるのではないか。ひいては政治を市民の手に取り戻すことの一つのきっかけになるのではないかと考えた。

ここでは、その「模擬投票」の実際を記したい。

2. 概要

（ア）実施科目

・3年I類（総合進学）選択4「政治経済」（3単位）×3講座（約80名）

（イ）担当者

・森下暁、和田直樹、町田耕（政治経済講座担当者）

・宮坂正議（コーディネーター）

（ウ）実施日

・事前学習…平成24年12月5日（水）より四時限分

・模擬投票…平成24年12月14日（金）第1時限（家庭科室にて）

・事後学習…平成24年12月17日（月）第6時限

（エ）学習目標

① 衆議院選挙の流れを実際に経験させることで、教科書中心の学習をリアリティある生きた知識へと昇華させる

② 模擬投票の学習のなかで、各政党間の公約等を比較させ、現代の社会・政治問題の争点を理解する。

（オ）タイアップ

東京都内に事務局を置く「模擬投票推進ネットワーク」（＊以下「模擬選ネットワーク」）（代表：林大介氏…文科省生涯学習政策局政策課専門職）と連携し、「未成年〝模擬〟選挙2012」に参画した。この試みには全国約30校（県内からは6校）が参加し、約6000人の未成年が模擬投票を行った。

また、実際の国政選挙で使用される「投票箱」を、東御市選挙管理委員会より貸与いただいた（写真1）。

3. 授業展開

模擬投票日を衆議院議員総選挙直前の12月14日（金）第1限とし、そこから遡って四時限分を事前学習とした。実際の総選挙後の12月16日（月）に本校内の結果を発表し、実際の選挙結果との比較に若干の考察を

写真1 「本物の投票箱」は学習に緊張感を持たせた。（abn「abnステーション」より）

加えることとした。

（ア）事前学習

①　12月5日（水）（森下、町田、宮坂）…ガイダンス、総論

⇩　模擬投票行う旨を伝え、模擬選挙管理委員を各講座から2名ずつ選出。

⇩　衆議院議員総選挙の形式（小選挙区比例代表並立制、最高裁判所裁判官国民審査）等を復習。

⇩　実際の候補者や政党名を紹介。

②　12月7日（金）（森下、町田、宮坂）…比例代表

⇩　比例代表制の仕組み、特徴等を確認。

⇩　比例代表（北陸信越ブロック）の争点を紹介。

⇩　ワークシートを利用し、各政党の選挙公約を比較。「原発」「TPP」「消費税」の争点に加え、各自気になる争点を設定。新聞各紙を利用した。

③　12月10日（月）（森下、和田、町田）…小選挙区

⇩　小選挙区制の仕組み、特徴等を確認。

⇩　小選挙区（長野3区）の候補者の紹介と比較。主に新聞各紙を利用した。

⇩　②時限目のワークシート未完成者はそのつづき。

⇩　「模擬選ネットワーク」より届いた各政党の政策冊子とポスターの紹介。

④　12月12日（水）（森下、和田、町田）…国民審査

⇩　最高裁判所裁判官国民審査の仕組み、特徴、意義等を確認。

⇩　実際に審査に付される裁判官を紹介。新聞記事を活用。

（イ）事後学習

①　12月17日（月）（森下、和田、町田）…考察

⇩　本校内での投票結果と、実際の選挙結果を比較。若干の考察。

⇩　レポート課題

政策比較等の学習には、主に新聞各紙を利用した。本来であれば各政党の選挙公約を参照して比較するべきだが、時間の都合上、各争点別に整理されている新聞紙面を活用した。ただ、新聞各社の争点の扱い方や記述のニュアンスは若干違うため、地元信濃毎日新聞に加え三大紙を中心に、なるべく多くの紙面がミックスされるよう配慮して資料を作成した。

教材情報については「模擬選ネットワーク」からも提供いただき、各政党の選挙公約冊子やポスターをお送りいただいた。授業の中ではそれらを分析する時間がなかったため、紹介するにとどまった。

4．投票と結果

（ア）会場の設営

前日に担当教員で設営。会場は家庭科室で、比較的広かったために大変助かった。実際の選挙と同様の形になるよう配慮した。（図1）

投票用紙は「模擬選ネットワーク」より提供されたデータに若干の修正を加えて使用。用紙の色は都道府県によって違い、本校では長野県にあわせ小選挙区を「オレンジ」、比例代表を「みずいろ」（正式には「浅葱色」）、国民審査を「白」とした（写真2）。

（イ）投票当日の流れ

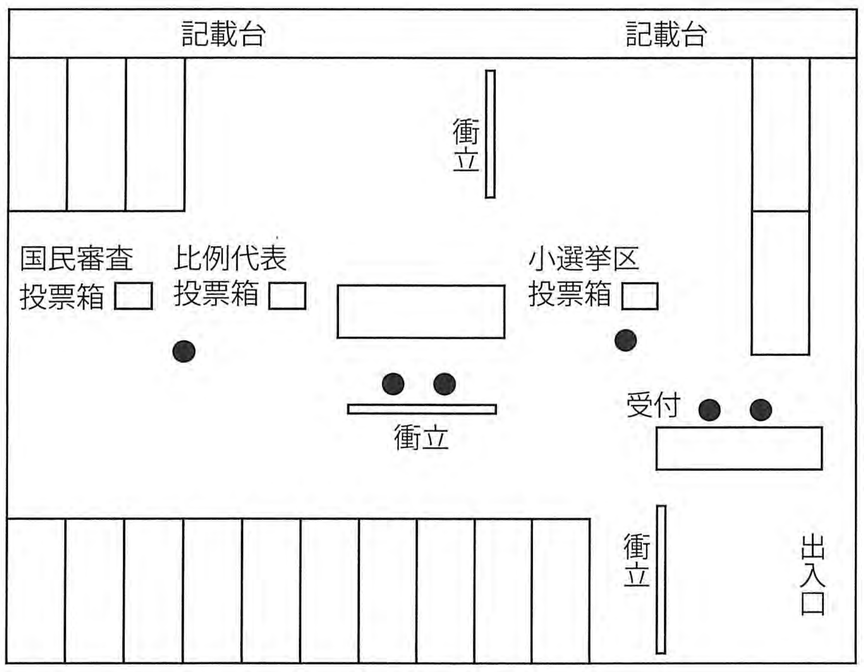


図1　会場図(家庭科室)
＊図中●は選挙管理委員

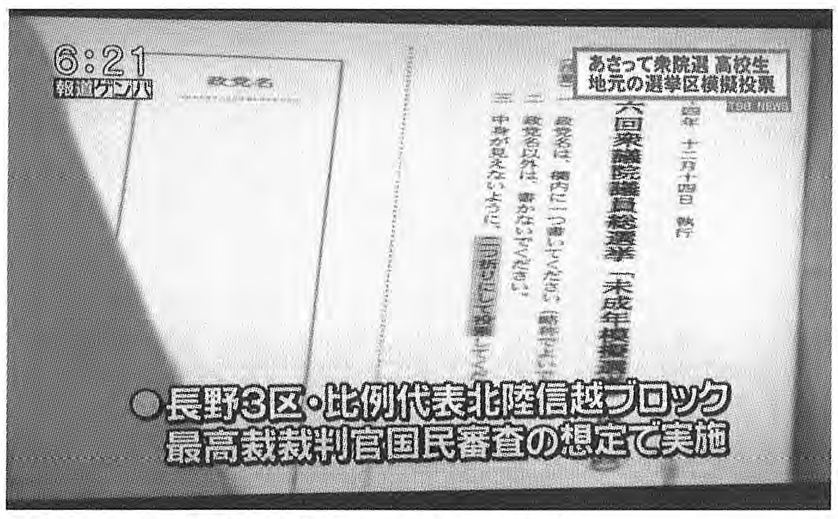


写真2　本物に似せた投票用紙
（TSB「報道ゲンバ」より）

朝のＳＨＲで６名の選挙管理委員が家庭科室に集合。投票の流れを確認。第１時限が始まると各教室で投票の流れを再確認し、投票先を決めるよう指示。その後、講座順で投票を行った。この方式では原理的に「棄権」がなく、投票率を算出することはできない。

投票１人目の生徒には、実際の選挙と同じように投票箱の中の確認作業をおこなった。のちに続いた投票の流れは大変整然として混乱なく終了。投票から教室に戻るところで各種メディアのインタビューを受ける生徒が多かった。

（ウ）即日開票と結果

放課後に選挙管理委員（６名）で開票。投票数は76で、作業は１時間弱で終えた。開票結果は表１に示すとおりである。

表１　本校での「模擬投票」結果

小選挙区（長野県第3区）

立候補者名	(政党)	得票数	備考
井出ようせい	(みんな)	31	当選
井出泰介	(維新)	17	
木内ひとし	(自民)	11	
寺島よしゆき	(民主)	8	
いわや昇介	(共産)	8	
無効票		1	白紙(1)
総数		76	

比例代表（北陸信越ブロック）定数11

政党名	得票数	議席数
日本維新の会	18	3
みんなの党	14	3
自由民主党	11	2
社会民主党	7	1
民主党	7	1
日本共産党	6	1
幸福実現党	3	0
日本未来の党	3	0
公明党	1	0
無効票	6	*白紙(3)、人名(3)
総数	76	

最高裁判所裁判官国民審査「模擬審査」

投票数76　過半数38　無効票なし

氏名	不信任	備考
山浦　善樹	15	罷免せず
岡部喜代子	18	罷免せず
須藤　正彦	18	罷免せず
横田　尤孝	15	罷免せず
大橋　正春	16	罷免せず
千葉　勝美	16	罷免せず
寺田　逸郎	17	罷免せず
白木　　勇	17	罷免せず
大谷　剛彦	16	罷免せず
小貫　芳信	14	罷免せず

5．考察

（ア）投票結果の分析

①　本校での結果について

投票総数が76しかないため、現実には統計学上ほとんど意味のない数字であることには注意が必要である。ただし、傾向として「みんなの党」「維新の会」といったいわゆる「第三極」に人気が集まったといえなくもない。また、小選挙区での井出ようせい氏圧勝の背景には、氏が最も若い候補者であること、精力的に街頭演説をこなし、高校生にも顔が知られていたことなどがある、と生徒の声などから推測できた。西高生の投票傾向は、これまでの各政党に対するイメージや「しがらみ」や「組織票」といったものに縛られることなく、高校生なりに純粋に比較検討した結果だろう。

②　全国での結果について

全国の未成年（中高生が主）の投票総数は６０７５。各政党の得票率は図２に示す通りである。実際の衆院選に比べ、民主、みんな、共産、未来の得票率が高く、自民、維新、公明は低かった。模擬選ネットワークは、得票率の上では実際の選挙と大差なかったとしながらも、高校生は長期的視野に立って投票し、実際の有権者は短期的視野で投票したのではないか、としている。

（イ）「模擬投票」への生徒の反応

①　各種メディアによるインタビューから

何人かの生徒のＴＶインタビューでは、いずれも大変しっかりとした意見が述べられている。

Ａ（女子）は、「消費税問題や原発問題に注目して投票」し、また「自分が模擬投票で投票した一票が少しでも政治家に耳を傾けてもらえたら良いと思う」と述べた（写真３）。Ｂ（男子）は、「選挙で若者の意見が言える場がせっかくあるのに政治的無関心が広がるのはもったいない」と述べた。Ｃ（女子）は、「これから自分たちに関わってくることだし自分の意志で（今後の１票を）入れたい」と述べた。

②　事後レポートから

提出されたもの全てに目を通すことができたわけではないが、残念ながら生徒の１割弱はレポート課題自体を理解できていないようであった。

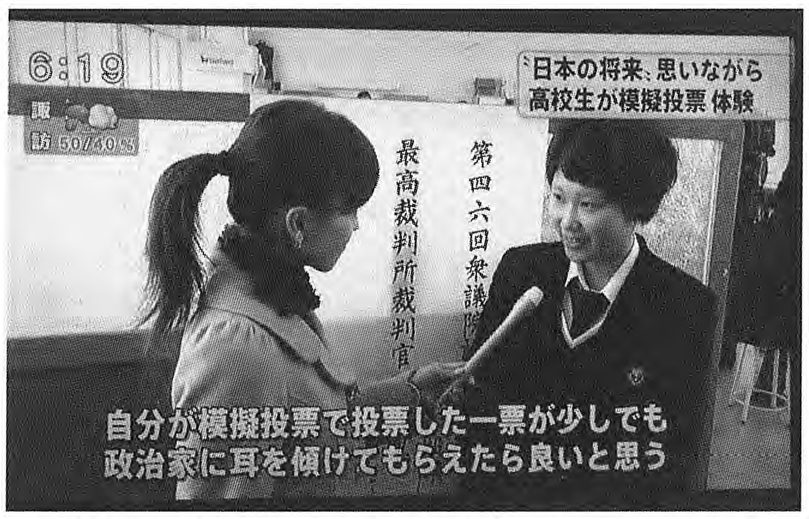


写真3　番組の意図に合う部分は強調される。(abn「abnステーション」より)

特に「争点」という言葉を理解していない者が目立った。例えば、注目した「争点」として「民主党から自民党に政権交代したこと」や「若いか若くないか」や「自民党が勝つか」を挙げている者などがあった。

残る約9割は、かなりしっかりした自分なりの「争点」を持っていたようである。興味の対象は多岐にわたり、原発、経済（TPP、消費税含む）、外交（「領土問題」含む）、震災後復興、教育（子ども手当、いじめ問題含む）などがあった。項目に偏りが少ないことから、主体的に取り組むことができた生徒は多かったものと考えられる。

一方、模擬投票の「感想」には、一定の傾向があった。本格的で刺激になったというもの。政治には無関心だったがそれなりに考え勉強になったというもの。若い世代がもっと政治にかかわるべきだとするもの。そして、選挙権を持ったら選挙に行きたい。総じていえば、生徒にとっては記憶に残る大変いい経験になったようである。ただ、全体的に西高生は素直で「従順」であることもここから読み取ることができる。決して「批判精神」が育っているわけではない。

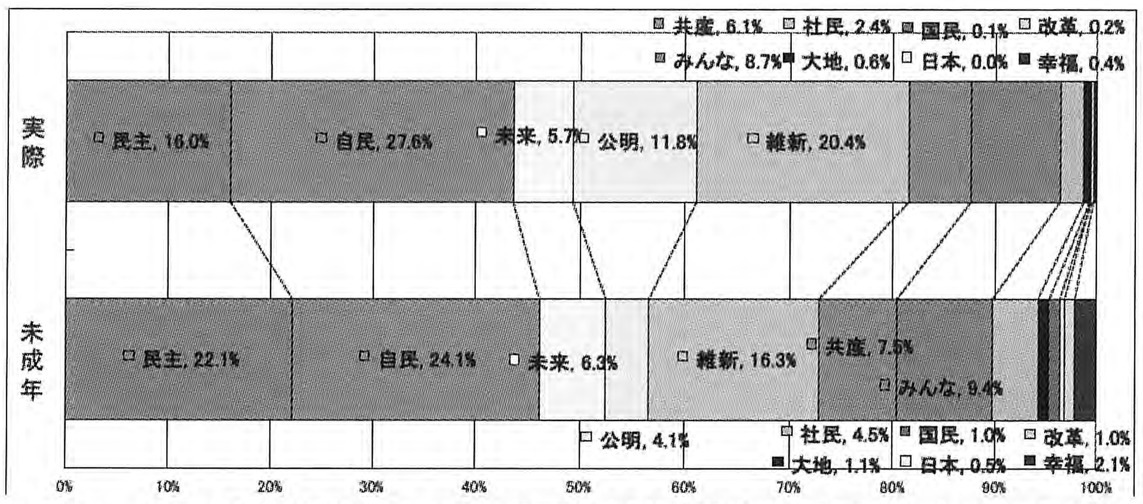


図2　全国「未成年‘模擬’投票」の結果（模擬選ネットワーク提供）

6. まとめ

第二次安倍内閣が発足して2か月。短期的には「アベノミクス」が市場に好感を持たれているものの、様々な長期的課題はいったん棚上げとなっているかのようだ。これが日本をどのような未来へ導くかについて論じるのは他に譲らねばならないが、生徒たちが将来、今回の「模擬投票」を思い出し、その結果の社会がどうなったか評価できるようになってほしい。ほとんどの生徒は選挙へ行くことの重要性が身近なこととして感じられたという感想を残しており、記憶に残ったという生徒が多いということから言えば、目的の一部は達成されたということになる。各種メディアが注目してくれたことも、生徒にとっては間違いなく刺激になった。テレビ4社、新聞4社が扱ってくれたことで、生徒にも企画した教員にも緊張感があった（写真4）。

もちろん、事前・事後学習があったからこそ、「投票」の場が生かされたことになる。ただし、今回のような急な日程には無理があった面もある。共通の資料を準備したにせよ3名の講座担当者の扱い方に必ずしも統一感があったとは言えない。今後は「模擬投票」という良き素材を、統一感ある西高スタイルの「公民」教育パッケージにできるかが課題のひとつだ。また、こうした「現実」と「教室」とを結び付ける学習を、3年生の最後に「集大成」的に、ではなく、もっと早い段階で、学習の「動機づけ」としてできないだろうか、という気もする。一過性のイベントではなく、3年間の学習の中で生徒をどう学ばせるのかという観点での捉えかえしは必要であろう。

今回は本校で初めての試みであっただけに、どのように組み立ててゆくべきか迷った面も多々ある。だが、担当者4名の協力体制と学校内外各方面のご理解ご協力でなんとかかたちにすることができた。この場を借りてお礼申し上げたい。今後も研究を重ね、より学習効果の上がる方式にし「西高に模擬投票あり」となるのもいいだろう。諸兄に様々なご助言をいただければ幸いである。

写真4　投票第1号は投票箱の中を確認できる。多くのカメラに囲まれ緊張気味。

「鐵の道」題字（全国ローカル鉄道応援酒）
揮毫に取り組んで

書道部顧問　藤澤文栄

【参加のきっかけ】

「鐵の道」プロジェクトは内閣府が進め、全国の大学が開講している「地域活性化システム論」と国土交通省の「新たな公」と言うモデル事業として始まったプロジェクトです。趣旨に同意した全国のローカル鉄道会社と沿線の酒造会社がコラボレートして共通銘柄「鐵の道」をローカルブランドとし、地方の特質、自慢や誇りをPRして、地域活性化、地域再生を進めて行こうとするものです。

千葉大学大学院准教授の佐藤建吉先生からお誘いを受け、地域の力の中で「高校生の力」が活かされるべき資源であることを教わりました。そして、書道部がその資源としてお手伝いをできるのであれば、是非生徒にも話してみたいということでスタートしました。

【経過】

この活動に参加してから早一年半が経とうとしています。まず、書道字典を参考にいろいろな雰囲気、いろいろな書体の字を書いてみることからスタートしました。

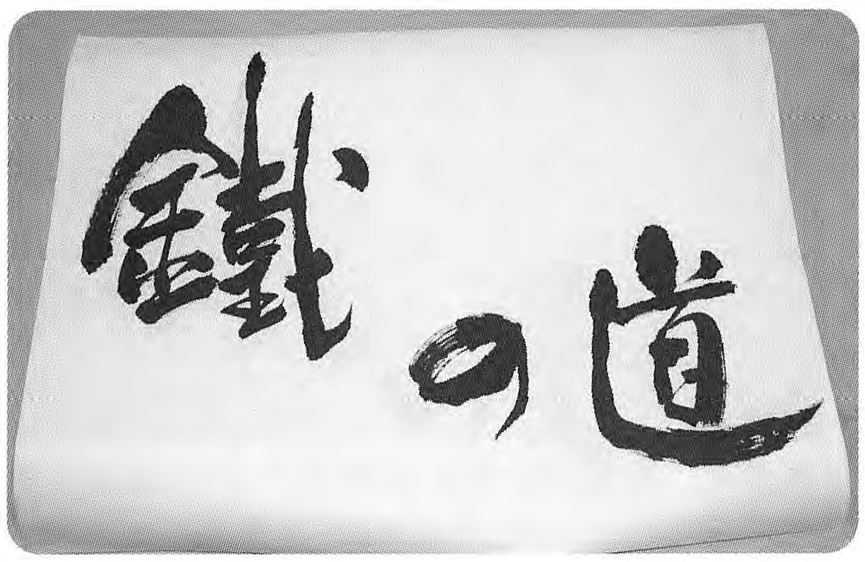
卒業の時期を迎えた三年生も含め、部員4名で様々なイメージを作ってみました。そしてほぼまとまったイメージを今年度の部長が引き継ぎ、最低限の条件である「しなの鉄道線路図（篠ノ井―軽井沢）の流れにあわせて」に文字の流れを工夫することをできる限り織り込みつつ、さらに書き込みをして線に充実感を出すように進めました。その間プロジェクトに関わる多くの方々に意見を頂戴し、話し合いをしながら進め、昨年10月に酒造会社に作品を引き渡すことができました。現在は実際のラベル（4合瓶用）に合うサイズ合わせ、最終デザインの校正が進んでいます。

【取り組みに深みをもたらす効果】

書作品の制作といった視点で見るとラベル揮毫ということも特別変わった点はないと思っていたのですが、そうではありませんでした。

例えばイメージ作りの文字の選択の段階では、「鉄」（かね・うしなう）ではなく「鐵」を…。のように字面や意味だけではなく「ラベル」としての価値を含めた気配りを求められることがありました。普段の作品制作に一段も二段も深い意味合いを持たせた表現を追求しなければならないことを合点したところです。普段の活動では得られない経験をさせていただきました。

作品（文字を素材に表現する）作りの作業に加えて、相手の立場をくみ、表現意図を言葉で伝える作業も大事でした。これらの積み重ねのおかげで制作に向かう姿勢は徐々に熱を帯び、意欲につながっていく姿を見ることができました。最後に、今後製品の中身共々話題にしていただけるものになることを願っています。そしてこの取り組みを今後の取り組みに活かしたいと思います。



上田西高校のキャリア教育

進路指導係主任　**森下　暁**

上田西高校では数年来キャリア教育の向上に努めている。進路指導では、①「自己理解を通じて自分の価値を見出し、そこから職業観の形成につなげること」、②「職業理解を行うための情報の場の提供」を基本に、さまざまな活動を生徒に提供してきている。

中央教育審議会答申では、キャリア教育を「基礎的・汎用的能力」の育成ととらえており、この能力はを、「ａ人間関係形成・社会形成能力」「ｂ自己理解・自己管理能力」「ｃ課題対応能力」「ｄキャリアプランニング能力」に整理している。本校がキャリア教育として取り組んでいる内容を上記４つの能力と関連付けまとめると、次のようになる。

①Ｒキャップの実施　↓　該当能力ｂ、ｄ

近年実施している、Ｒ－ＣＡＰとは、適性検査とその結果を基にした自己理解を深めるプログラムである。ただし、この内容は検査結果そのものが生徒個人の適性を指し示すものではなく、あくまで「生徒の自己理解に対しての動機づけ」という観点で行っているものである。また、Ｒ－ＣＡＰでは、適性を基にしたワーク課題を１～２年を通じて８回ほど実施する。職業・学問を調べるという作業を通じて、「自分の将来を仮定的に捉え計画する」というキャリアプランニング能力を育成する効果があるといえる。

②学年に応じたガイダンスの実施　↓　該当能力ｄ

（１年：職業理解　２年：学問理解　模擬授業形式　３年：各大学・専門学校の情報の確認）

大学や専門学校の向こうにある社会を認識し、そのうえで自己の適性と照らし合わせながら具体的な将来設計を行うための基礎的な知識を得る。１年の職業理解では、実際の職業を、体験などを通して知ることで、自分の将来像を明確にする。２年生では、１年で形成した職業観を、その職業に就くために手段としての進学、就職という意識を持たせ、大学に行くことを目的とはしない姿勢を育てるために、学問を意識した内容にしている。３年生では、１、２年の活動を通じて、進学・就職のために必要なより具体的な情報を収集し、それを自分の進路に役立てるために実施している。

③各種講演会の実施・参加

・「卒業生の声」　↓　該当能力ｂ、ｄ

本校卒業生による進路講話を実施。１年生は主に職業講話、２年生は学習講話を実施している。また、同様に教育実習生による進路講話も実施している。上田西高校の卒業生は、同程度の環境で育った先輩であり、そのため、自分自身が将来どの程度成長できるかいう点で自分をとらえなおすこともできる。

・プロジェクトアドベンチャー（１年学習オリエンテーションにおいて）　↓　該当能力ａ

この活動は、他人とともに何か一つの目標を達成する経験を得ることができる活動である。具体的には、他人のために自分の行動を抑制したり、他人を信頼したうえで行動を行ったりといった経験を積むことができる。

・小論文講演会　↓　該当能力ｂ

推薦入試等に向けての文章力の向上という一つの明確な目的があるが、小論文模試とその指導に関しては、小論文という課題に対して、それをどのようにクリアしていくかという解決能力の学習をおこなうという側面も持っている。事前指導、事後指導を行うことで、課題に対してどのように取り組むべきか、そして実際に取り組んだものがどのように評価されるのかを知る機会といえる。

④進路希望調査の実施　↓　該当能力ｂ

進路意識を確認することを通じてその都度自己理解を深めるように暗に迫ることを目的としている。また、今年から「個人カルテ」を運用することによって、それまで定点的であった自己理解を、３年間という期間でとらえられるようにした。今の自分と過去の自分を見比べることにより、その先にある未来の自分をより具体的に想起できるようなることを期待している。

⑤職業・学問経験の充実　↓　該当能力ａ、ｂ、ｄ

・オープンキャンパス、看護体験、各種ボランティア体験、インターンシップ、夢ナビライブ、１年遠足時の職業・大学見学

自らの職業適性・学問適性をしるためには、体験に勝るものはないのではないか。そのため、さまざまな機会を通じて学校の外を見る機会を与えることを進路としては大切に考えている。

⑦保護者向けキャリア講演会の実施　（↓　該当能力ｄ）

「学年ＰＴＡ」や「ＰＴＡ進路を考える会」を通じて保護者のキャリア教育の理解を深める活動を実施している。

保護者の就職した時代と現代はあまりにも就職に関する社会情勢が異なっている。その中で、保護者がどのように子供の進路を導いていいのかわからないという悩みをもっている。生徒の一番身近にいる保護者が自信を持って進路相談を行えることは生徒のキャリア形成に大きなプラスとなるといえる。

以上が進路指導係主導で行っている活動の意味付けである。しかし、本来キャリア教育全般は、進路指導の活動だけではなく、生徒会活動や生徒指導の活動、日々の授業の中で培われるものである。進路指導係では、学校全体で生徒のキャリア教育を行える体制を今後さらに整えていきたい。

平成24年度　上田西高校進路合格実績一覧（12月14日現在）

四年制大学（国公立）

大学名	人数
信州大学	1
都留文科大学	1（1）

四年制大学（私立）]

大学名	人数
愛知工業大学	1
朝日大学	1
亜細亜大学	2
江戸川大学	1
桜美林大学	1
神奈川工科大学	2
神奈川大学	6
金沢工業大学	2
関西国際大学	1
関東学院大学	2
京都嵯峨芸術大学	1
群馬パース大学	1
国士舘大学	3
駒澤大学	2
埼玉医科大学	1
埼玉学園大学	2
佐久大学	2
芝浦工業大学	1
十文字学園女子大学	1
淑徳大学	1
城西大学	9
尚美学園大学	1
駿河台大学	2
清泉女学院大学	1
聖徳大学	1
西武文理大学	3
専修大学	2
大正大学	1
大東文化大学	1
拓殖大学	1
玉川大学	4
千葉工業大学	1
中央学院大学	1
中京大学	1
中部大学	1
帝京大学	3
東海学園大学	1
東海大学	1
東京福祉大学	2
東洋学園大学	1
東洋大学	1
長岡造形大学	1
長野大学	4
名古屋経済大学	1
新潟医療福祉大学	1
日本大学	2
日本福祉大学	1
白鴎大学	1
松本大学	3
武蔵野大学	1
武蔵野美術大学	1
明星大学	1
目白大学	1
山梨学院大学	2
立正大学	1
合　計	94

短期大学

学校名	人数
長野県短期大学	（1）
上田女子短期大学	4
群馬医療福祉大学短期大学部	1
佐久大学信州短期大学部	1
清泉女学院短期大学	3
聖徳大学短期大学部	1
松商短期大学	1
合　計	11(1)

専門学校

学校名	人数
青山ファッションカレッジ	1
上田情報ビジネス専門学校	6
ｴｺｰﾙ辻東京専門学校	2
太田医療技術専門学校	2
太田自動車大学校	1
大原学園	1
大原スポーツ公務員専門学校	2
北里大学保健衛生専門学院	1
黒木学園カレッジオブキャリア	1
群馬法科ビジネス専門学校	1
信州医療福祉専門学校	2
総合学院テクノスカレッジ	1
帝京高等看護学院	1
東京スイーツ＆カフェ専門学校	2
東京文化美容専門学校	1
東京メディカルスポーツ専門学校	1
東京リゾート＆スポーツ専門学校	1
東放学園専門学校	2
ﾄﾖﾀ東京自動車大学校	1
長野医療衛生専門学校	3
長野救命医療専門学校	1
長野県技術専門校	1
長野平青学園	2
長野理容美容専門学校	3
日本工学院専門学校	2
日本工学院八王子専門学校	2
日本大学松戸歯科付属歯科衛生専門学校	1
日本ホテルスクール	1
東日本栄養医薬専門学校	1
前橋医療福祉専門学校	1
松本調理師製菓師専門学校	1
武蔵野調理師専門学校	1
山野美容専門学校	2
横浜理容美容専門学校	1
合　計	53

就職

企業名	人数
上田angeグリーンパーク店	1
株式会社「くるまや」	1
株式会社ディック電子	1
桜ホーム	1
新光電気株式会社	1
宮後工業株式会社	1
合計	6

編集後記

創立50周年から2年経ち、新たに高見澤校長を迎え今年度をスタートしました。今年度初めて実施したグアム修学旅行、授業実践では社会科の国政と市民の関係を問う「模擬投票」の取り組み、地域起こしの一環として地元の酒造会社とコラボレーションで酒のラベルの制作等を、掲載しました。

２０１３（Ｈ25）年度入学生より特進・進学コースになります。カリキュラムも新しくなり、これまでの教育実践の上にさらに西高の教育を発展させていく必要を感じます。

ご覧いただいた皆様には、ご意見・ご批判をお寄せいただければ幸いです。

最後に、年度末の多忙の中、寄稿下さった教職員の皆さんに感謝申し上げます。

平成25年3月
上田西高の教育　第57号
発　行　上田西高等学校
上田市下塩尻八六八
http://www.uedanishi.ed.jp
TEL. 0268-22-0412